

市史だより

F u k u o k a

25

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Summer 2020

TAKE FREE

特集 根をく、見守る、 野間・若久

contents

- 08 市史編さん室トピックス
- 09 部会だより(考古・古代・中世・近世・近現代・民俗)
- 10 「新修 福岡市史」ナナメ読み
- 11 連載コラム「タイムマシンでとなりの駅へ」
- 12 連載コラム「福岡市史への歩み」

特集

拓く、見守る、 根をおろす 野間・若久

福岡藩の御山が、その後
たどった歴史とは。
文化村、デベロッパ、
早くから福岡市の住宅地
として、人々を魅了した
山々。

文＝市史編さん室



とがわかります（写真4）。

また、家臣が大名から山を与えられることが
ありました。知行地と同様に扱われたこの山
を、「拝領山」と呼んでいます。例えば、野間
村では、沢木七郎兵衛・岸田瀬兵衛（大組）が計
八〇〇坪を、若久村では、この沢木・岸田に加
えて、斎藤正右衛門・水野喜右衛門（大組）、三
宅和兵衛（馬廻組）、野上作大夫（城代組）が計
二万九〇〇坪を与えられています（国立公文書
館蔵「拝領立山根帳」。江戸時代中期頃）。このうち、
斎藤・野上の山は「しんかい（新開）」、三宅の山
は「原田山」と記されています。その名から現在
の若久三丁目や六丁目辺りにあったのでしょう。
野間村と若久村とでは、山の種類に違いも見ら

南区野間・若久^{わかひさ}と言え、
「野間四ツ角」の名
で親しまれる交差点、そこを通る大池通り^{おおいけ}や分岐
する若久通り（県道六〇二号線）といった幹線道
路に沿って、多くの店舗が建ち並ぶにぎわい、あ
るいは西鉄天神大牟田線の高宮駅^{たかみや}や大橋駅の近く
にあって、たくさんの方が暮らすまち、こうした
ことを思い浮かべる方がいらつしやるのではない
でしょうか。

この地域を含む筑紫郡八幡村^{や は た}（明治二十二
（一八八九）年に野間・若久・高宮・平尾^{ひらお}・屋形原^{やかたばら}
村が合併し、那珂郡^{な か}の一部として成立。同二十九年
から筑紫郡）が福岡市と合併したのは、大正十五
年（一九二六）年四月のこと。実はその頃、ここ
は福岡の山でした。

野間・若久は福岡藩の御山

江戸時代、福岡藩は自然災害を防いだり、木材
や燃料を確保したりするために、領内の山々を
「御山^{おやま}」として、その保全につとめていました。
御山にはいくつもの種類があります。例えば、藩
が直接管理する山のほかにも、武士や農民に草・
枝の伐採・使用を許す代わりに、木々を育てさせ
る「預かり山」などを設けています。さらには、
村や農民個人に薪や肥料として山の雑木・草を使
うことを認める「野山^{のやま}（草山）」「古野山^{ふるのやま}」、証文
によって専有を許す「証文山^{しょうもんざん}（証拠山）」なども
ありました。「那珂郡御山帳」によると、野間・
若久には、こうした御山が数多く置かれていたこ



12



11



8



13

8 南西方向から見た多賀町発足当時の景色。左端に写る三角屋根の家が、一番広いタイプの洋風建築

9 今も残る多賀町記念碑には多賀発足の経緯が刻まれている（昭和15年完成）。この碑は当初、組合で建碑委員を務めた山内修一の宅地内に建てられていたが、現在では朝日生命福岡多賀社宅敷地内に移されている。「多賀」の名は、組合で新しい地名を考えた際に楠崎広之助が考案したもの。その後、大正13年11月の八幡村会にて地名改称が可決されている

10 大池通りから1本入った裏通りにある文化橋。橋を架けた大神助吉は、計画地の東北に隣接する山林を所有しており、山内らの土地整備に協力する形で鉄筋コンクリート製の橋を架け、これを寄贈した

11 新聞に掲載された宅地開発の売出し広告。多くの分譲地には、開発会社により独自の愛称が付けられた。この「常春台」という名前は、広告によると作家の水足蘭秋による命名とあり、それを売りの一つにしていた。なお、愛称とともに土地の魅力を表した売り文句には、昭和19年になると「疎開地に最適」などの言葉が見られるようになる

12 昭和30年代の若久通りを歩く親子。幅が狭く未舗装の道路をバスが通ると、もうもうと砂煙があがったという

13 現在の若久通り



10



9

吉により橋が架けられ、「文化橋」と命名されました。この名は、山内らが計画した住宅が、当時珍しかった洋風設計や電化住宅などを取り入れた「文化住宅」だったことから、新聞がここを「文化村」と呼んでいたことにちなんだものです。

土地の造成が終わると、山内らは「野間住宅組合」を結成し、いよいよ組合員の家を建て始めます。三条 栄三郎（福岡県庁の建築技師。住人の一人でもあった）の設計案をもとに、間取りは広さによって三タイプとしました。なかでも一番広いタイプは、急勾配の赤い屋根が映えるロッジのような洋風建築でした。ほかの二タイプも、和風住宅ながらモダンな赤い屋根を採用しています。こうした山裾の美しい建物は、人々の目をひいたことでしょう。

この一連の計画は、都市で働くサラリーマンらにふさわしい、衛生的で文化的な暮らしを目指して、周辺の住環境に気を配ったことに特徴があります。例えば、庭に多くの木を植えること、塀を生け垣にすること、畑地では果物を栽培すること、街路に吉野桜を多く植えて風光美観を極めることなどの決まりをつくっています。まちを訪れる人々をも意識したこの取り組みは、現在の景観重視のまちづくりを先取りしたものと言えます。

大正十三年、各住宅が完成し、野間の山裾に先進的で美しいまちが生まれました。すべての工事

が完了したことを機に、住民から新しいまちには新しい名前が必要との声が上がると、住民の楠崎広之助の発案により、この地は「多賀」と名付けられました。この「文化村」を早い例として、野間・若久の山々は、段階的に住宅街へと変貌していくこととなります。

●戦争中におこなわれた山の開発・分譲

大正末から昭和十年代は、東京や大阪などの大都市を中心に、郊外の住宅地開発が積極的に進められた時期でした。福岡市でも昭和十三（一九三八）年頃から、デベロッパーによる土地の開発や分譲販売が活発化します。その盛んな動きは、当時の福岡の新聞・雑誌に載っている「高級住宅地」「別荘地」などの販売広告によく表れており、あわせてうたわれた「投資」「国債」「銃後」「新体制」といった言葉は、当時の世相を感じさせます。

この頃の高宮地を見ていくと、「高宮」の名が多いことに気がきます（昭和十三〜二十年の間で市内の約六〇カ所のうち約五分の一）。ところが、この「高宮」と呼ばれた場所のほとんどは、現在の野間・若久の丘陵地なのです。この地域の山が、郊外の住宅地としてふさわしい場所と評価されていたことが窺えます。

背景には、九州鉄道（大正十三年開業。現西鉄天



14 空中写真（上：昭和31年／下：昭和56年）。水田や丘陵がすっかり家となり、昭和31年の写真では中央にあった池が、昭和56年には東若久小学校に変わっている

15 建設中の東若久小学校の体育館（昭和53年）

16 かつての若久団地。現在は団地の再生事業が進んでいる

17 池の底から見つけたという原田山地蔵尊（山の神さま）

18 若久住吉神社への登り口。階段の左に見える道は、若久の丘陵の上を縦断して南区皿山に至る旧道



● 見えなくなる山

神大牟田線やバスにより、福岡市中心部へのアクセスが良くなったことがあるでしょう。また、高宮・野間の区画整理事業（昭和五十九年）、若久川沿いから屋形原に続く「六間道路」の開通など、まちの新しいさも後押ししていたと思われます。さらには、その売り文句によれば、当時の健康志向が、きれいな空気と水、静かな住環境を持つ場所として、野間・若久の魅力を高めたようです。

戦局の悪化につれ、分譲地の販売は減少していきましたが、意外にも戦争中のごく短い時期に、はやばやと野間・若久の山々は、その姿をまちへと変え始めていたことになります。

第二次世界大戦が終わると、全国で住宅難がおりました。福岡市でも、市の中心部が空襲で焼けたり、博多港に引揚船がぞくぞくと到着したりするなかで、家不足が深刻になりました。昭和二十三年には、二万戸以上が不足していたと言われています（『福岡県住宅復興誌Ⅰ』）。国の復興政策に従い、福岡県や市は、公営や福岡県住宅協会（供給公社の前身）などの団体によって、人々へ住まいの供給を進めました。昭和二十年代後半には、行政主導の家がつつぎと建つようになり、若久周辺でも増えていきました。

急に増えた子どもたちを受け入れるために、

この地域では小学校の新設が続きました。昭和三十二年、若久の山の上に、市立若久小学校が開校します。山を切り拓いて建てたため、授業が始まってからも大がかりな土地造成や校舎の建設が続き、当時は大変な苦勞があったそうです（『西日本新聞』昭和三十二年九月五日、『若久小学校創立三〇周年記念誌』）。

さらに昭和三十九年、丘陵を造成して建てられた市営若久団地への入居が始まると、若久地域の人口はわずか一年で、三〇〇人以上も増えました（『福岡市統計書 昭和四十年版』）。当初、若久団地の子どもたちは、若久小学校と三宅小学校とに分かれて通っていましたが、昭和四十四年、若久団地のそばに新しく筑紫丘小学校が開校するに至りました。

● 水の底から見つけた「山の神さま」

昭和五十三年には、若久小学校と花畑小学校の一部を分割して、東若久小学校が誕生しました。建設にあたっては、若久財産区や個人が、八良ヶ浦池の北側部分と池の隣接地を提供しましたが、池を埋め立てるときに、水の底からお地蔵さまが見つかったと伝えられています。

現在、このお地蔵さまは、東若久小学校のすぐ西の石段をのぼった先、ちょうど小学校を見下ろすような場所に安置され、「山の神さま」と呼ば

れています。この名は一带が山であることに由来するようですが、今では多くの家が建つばかりで、あまりピンと来ません。しかし、東若久小学校校歌に「原田山 原田山 巡る坂道 拓かれて拓かれて 栄えいく街」(作詞・高良竹美、作曲・奥山晴美)とある通り、山は拓かれて家が建ち並び、山を巡る坂道は生活道路として整えられ、姿を変えていったのでしょう。「山の神さま」は、地域の景色が様変わりしていく時代に、かつての山の記憶をたどって付けられた名だったのかもしれませんが。

お地蔵さまの世話を引き継いでいる下田義正さんにお話を聞くと、お地蔵さまに鎮座の場所を提供した方、月々の供物を絶やさなかった方、建設会社に勤める腕を活かして小堂をととのえた方など、かつての世話人たちのことを語りながら、「私もいつまでしきるかわからんけども、そうやって語り聞かされてきたけんね」と笑って話してくれました。

街路を歩いていけば見落としそうなお地蔵さまですが、こうして語られるお話を伺ってみれば、地域の今と昔の姿がその背にクロスしていることがわかります。ごく普通の住宅街に見えるまちも、そうした小さなバトンの受け渡しの無数の積み重ねによって現在の姿がある、その一端をよく表しているお話と言えます。

● 山の上の神社が語るまちの昔

現在、野間・若久のかつての御山はすっかり家に覆われ、多くの人々が住むまちになっています。それでも、住宅街の坂道をのぼっていくと、高い場所に鎮座して、今なお木々に囲まれる神社が、昔ここが山だったときの面影を感じさせます。最後に二つの神社を紹介します。

若久通り沿いの鳥居をくぐり、急な階段をのぼると、若久住吉神社(現南区若久二丁目)が見えてきます。大きくはありませんが、重厚な屋根が印象的な社殿です。山の上を走る旧道脇のこの神社は、古くから地域のランドマークでした。

その由緒をたどると、室町時代、筑前・国守護代が対馬の国人に「筑前国住吉内三郎丸名田地十二丁、同若久三丁」を与えたことに遡ります(応永十三〜一四〇六年六月一日「真正宛行状」『長崎県史料編第一』)。博多区の住吉神社に伝わる古文書にも、同社の所領として「三町 同(那珂)郡之内 若久村在之」と書き上げられています(年未詳。『新修 福岡市史資料編中世1』四一八頁)。住吉領が遅くとも室町時代までに成立したのちに、博多から住吉神を勧請して、山の上から人々を見守ってもらったのでしょうか(『筑前国那珂郡住吉神社縁起』)。

一方、野間の住宅街の高い場所にある野間八幡

宮(現南区野間二丁目)は、大きな建物に囲まれて、姿が見えづらくなっていますが、境内や周囲にはいくつもの石碑が建ち、地域の中心的な場所であることがわかります。

野間という地名は古く、鎌倉時代、博多の承天寺の創建にあたって(仁治三〜一二四二年と伝えられています)、謝国明が寄付したという土地のなかに「那珂郡高宮・野間」の名があります(『新修福岡市史資料編中世2』五一五頁)。そうした背景から、かつて野間には承天寺の末寺もあったようです(江戸時代にはすでに廃絶。『筑前国続風土記拾遺』引用「筑前国中京五山東福寺一派現廃寺等目録」)。

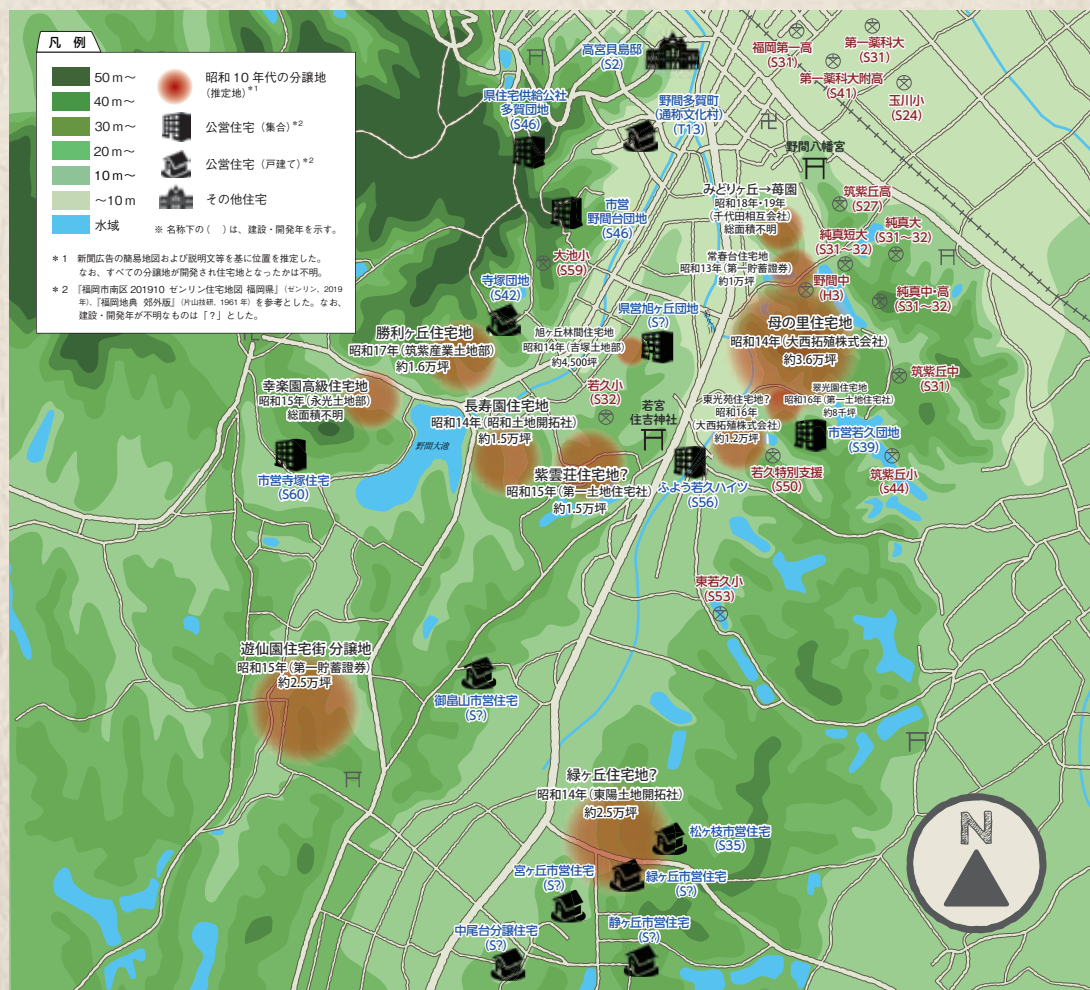
この承天寺領となった土地は、もともととは謝国明が筑崎宮から買い入れたものと伝えられます。筑崎宮が祀るのは八幡神。野間八幡宮は、宝永年中(一七〇四〜一七二一年)に高宮八幡宮(現南区高宮四丁目)から勧請されたと言われますが(『筑前国続風土記拾遺』)、八幡神とのお付き合自体は、高宮・野間両地域ともにずいぶんと古く遡りそうです。

山々の変化を見つめてきた二つの神社は、かつての山の面影を見せながら、こうしたまちの由緒を知る手がかりをも私たちに伝えてくれます。これも両神社を長い間大事に守り継いできた人々があつてこそ。歴史のバトンは、地元で日々受け継がれています。



まちになった山 [野間・若久の開発 MAP]

昭和初期の野間・若久は、鉄道の敷設や現在の若久通り・大池通りなど都市計画道路の整備が進んだことで利便性が増し、周辺の山では住宅のための土地造成や開発が進みました。戦後、昭和20年代後半～30年代になると、筑紫丘高校や純真大学などの学校ができ、これまではなかった人の動きが加わります。昭和30～40年代には社宅や寮、公営の集合住宅なども多くつくられたことで、小・中学校等がぞくぞくと新設されました。大正期の野間「文化村」建設を皮切りに、約50年間で山からまちへと急速にその姿を変えた野間・若久を、地図で概観できるようにしました。特集の記事とあわせてご覧ください。



【参考文献】●青木正夫「明治以降の住様式の変化・発展に関する一考察」(『住宅建築研究』12、一般財団法人住総研、1986年) ●「新しい町づくりを目指して 東若久公民館20周年記念沿革誌」(新しい町づくりを目指す会、2001年) ●片木篤ほか編『近代日本の郊外住宅地』(鹿島出版会、2000年) ●橘川武郎ほか編『日本不動産業史 産業形成からポストバブル期まで』(名古屋大学出版会、2007年) ●記念誌部編『校区創立30周年記念誌 ふれあいのまち東若久』(東若久校区創立30周年記念事業実行委員会、2011年) ●鮫島和夫「住宅組合法による住宅供給の実際と教訓」(『都市住宅学』23号、都市住宅学会、1998年) ●島村恭則「野方・若久一団地の暮らし」(『新修 福岡市史』民俗編二ひとと人々、福岡市、2015年) ●周藤利一「不動産政策史概論(第3回) 第3章 昭和戦前・戦中期の不動産政策」(『RETIO』N099、不動産適正取引推進機構、2015年) ●商工経営研究会編『臨時農地管理令臨時農地価格統制令の解説 問答式』(大同書院、1941年) ●大日本神祇会福岡県支部編『福岡県神社誌』(大日本神祇会福岡県支部、1944年) ●東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 弥生遺物篇(金属器)増補改訂』(東京国立博物館、2005年) ●長崎県史編纂委員会編『長崎県史』史料編第一(吉川弘文館、1963年) ●『西日本文化』492号(西日本文化協会、2019年) ●西日本文化協会『福岡県史』近代史料編 福岡県地理全誌(5)(西日本文化協会、1993年) ●西日本文化協会『福岡県史』通史編 福岡藩(1)(2)(福岡県、1998年・2002年) ●野間多賀町沿革誌編纂会編『福岡市野間多賀町沿革誌』(野間多賀町沿革誌編纂会、1940年) ●広渡正利『博多承天寺史』(文芸出版、1977年) ●福岡県住宅復興促進協議会編『福岡県住宅復興誌1』(福岡県住宅復興促進協議会、1959年) ●『福岡市学校教育百年誌』(福岡市教育委員会、1977年) ●福岡市教育委員会編『中村町遺跡3—中村町遺跡第4次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1122集(福岡市教育委員会、2011年) ●福岡市教育委員会編『中村町遺跡4—中村町遺跡第5次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1159集(福岡市教育委員会、2012年) ●福岡市史編纂委員会編『新修 福岡市史』資料編 中世1 市内所在文書・資料編 中世2 市外所在文書(福岡市、2010年・2014年) ●福岡市総務

局総務部統計課『福岡市統計書 昭和40年版』(福岡市役所、1966年) ●福岡市南区民俗文化財保存会編『南区ふるさと』(福岡市南区民俗文化財保存会、1992年) ●福岡市役所編『福岡市史』第2巻大正編(福岡市役所、1963年) ●福岡市役所編『福岡市史』第6巻昭和編後編(2)(福岡市役所、1971年) ●藤原恵洋「野間文化村／福岡 住宅組合による住宅地計画」(片木篤ほか編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、2000年) ●宮本雅明・川上義明「野間文化村の建設経緯—野間文化村について(1)」『野間文化村の構成と現存する組合住宅—野間文化村について(2)』(『日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)』日本建築学会、1982年) ●山口廣編『郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア』(鹿島出版会、1987年) ●20周年記念事業実行委員会編『若久 創立20周年記念誌』(福岡市立若久小学校、1978年) ●30周年記念事業実行委員会編『若久小学校創立30周年記念誌』(福岡市立若久小学校、1987年)

【所蔵】北島寛 ▶ P.4 12 ●九州大学附属図書館付設記録資料館 ▶ P.3 5 ●国土地理院 ▶ P.5 14 (上：1956年撮影／下：1981年撮影) ●国立公文書館 ▶ P.3 4 ●市史編さん室 ▶ 表紙・P.2 3・6・7・P.4 9・10・13・P.5 17・18 ●島村恭則 ▶ P.5 16 ●東若久小学校 ▶ P.5 15

【転載】野間多賀町沿革誌編纂会編『福岡市野間多賀町沿革誌』(野間多賀町沿革誌編纂会、1940年) ▶ P.4 8 ●福岡市教育委員会編『中村町遺跡4—中村町遺跡第5次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1159集(福岡市教育委員会、2012年) ▶ P.3 2 ●『福岡日日新聞』昭和13年12月4日(『CD-ROM版福岡日日新聞 昭和編』(西日本新聞社) ▶ P.4 11

【作成】P.3 1 ▶ 1904年発行2万分の1地形図「福岡」「博多」(大日本帝国陸地測量部、「正式二万分之一地形図集成」(柏書房、2001年)に所収)を基に加工 ●P.7 ▶ 1940年発行2.5万分の1地形図「福岡南部」(国土地理院)を基に加工

【協力】安藤文英、北島寛、下田義正、西日本文化協会、林文理、福岡市立東若久小学校(敬称略)

レポート

第14回・第15回福岡市史講演会を開催しました

平成30年12月22日(土)、第14回となる福岡市史講演会「活字文化の過去・現在・未来—金属活字からデジタルフォントまで—」を開催しました。学術的な内容が多い通常の市史講演会とは少し違った趣向の講演会でしたが、年末の連休中にもかかわらず200名を超えるお客様にご来場いただきました。

この講演会は平成29年に刊行した『特別編 活字メディアの時代—近代福岡の印刷と出版』の連動企画として開催しました。明治以降の活字をめぐる歴史から、金属活字やデジタルフォントをつくる工程、さらに「文字」を使って本をつくり、その本が書店を通して読者に届くという一連のプロセスを追う形で、活字や文字、本に関わる各専門家の皆さんに登壇いただきました。

まずは各トピックについてお三方に解説をお願いしました。大串誠寿さんは西日本新聞社デザイン部に籍を置かれていますが、芸術工学の分野から現在の『西日本新聞』の前身である『筑紫新聞』の活字と、日本活字の祖と言われる長崎の本木昌造が製造した活字の比定方法とその背景について解説いただきました。続いてお話しいただいた野口勝さんは、印刷の総合商社で、創業時は鋳造活字を販売していた大阪の株式会社モトヤでシステム開発に携わるフォントシステムの専門家です。ここでは特に鋳造活字の歴史について解説いただき、さらにデジタルフォントの仕組みについてもお話しいただきました。最後にフォントデザイナーの藤田重信さん(株式会社フォントワークス)からは、デジタルフォントの字形デザインについてのお話を伺いましたが、デジタルフォントをデザインする際にも、実は活字が大きく影響しているといったお話は、大変興味深いものでした。

お三方の解説を踏まえ、「文字」を使って本をつくる立場から、出版社の忘羊社(福岡市)で編集をされている藤村興晴さん、そして福岡を代表するインディペンデント書店として全国にも知られるブックスキューブリック代表の大井実さんのお二人にも加わっていただき、改めて活字から写植、そしてデジタルフォントに至る流れや、黎明期に活躍した活字開発者やデザイナーについて、また現在の活字(フォント)と本を取り巻く環境など話題は多岐にわたり、貴重な機会となりました。

また、当日は講演の内容をより深く理解いただくため、講堂前のスペースを使い「本ができるまで」と題したパネル展示も開催し、来場された方々からは好評をいただいた催しとなりました。

令和元年10月5日(土)には、第15回福岡市史講演会「近世都市の記憶—江戸と博多、そのイメージを問う」を開催しました。最初に岩淵令治先生(学習院女子大学教授)から「幸せな江戸像を問う」と題し、近世に語られた江戸像の諸相や現代に氾濫する「江戸」表象と実態とのズレについてご講演いただきました。江戸・京都・大坂という三都の比較、江戸住人の側からの発信と外部からの視点の違いなど興味深い話題とともに、特に最後にお話しされた「稼ぐ文化財」、観光に特化した文化財の「活用」についての東京都での事例のご紹介については、規模の大きな先行事例として福岡市にとっても示唆に富む内容でした。続いて中野等先生(九州大学大学院教授)からは、「近世における『博多』ブランドの消長」と題し、「博多」を冠する物産品が近世を通じてどのように出現し、由緒が語られていったのかについて、地誌の記述を中心に地域アイデンティティの問題とも絡めてご講演いただきました。由緒が時代により変化していく様子や博多こまの語られ方に地域の特性が表れていることなど、町人や寺社の由緒を多数収録した『資料編 近世3』ともリンクした内容で、大変興味深いご講演となりました。

来場者アンケートでは「今まで持っていた江戸のイメージがくずれ、これから東京を違った見方でも見ることができる」、「商品化される『江戸』という話は目からうろこで、今の時代が良く理解できた」、「バイアスを排したものの見方の大切さ! とても楽しい視点からの博多ブランド史、興味は尽きません」、「大変面白かったが、郷土の歴史を勉強する者にとって何を信ずべきか」というご意見など、多数のご反響をいただきました。

それぞれの講演会の様子は、市史編さん室が発行している研究誌『市史研究 ふくおか』に掲載しています(第14回は第14号、第15回は第15号に掲載)。ぜひご覧ください。



● 考古

令和元（二〇一九）年七月二十三日、庚寅銘大刀が国の重要文化財に指定されました。この大刀は西区の九州大学伊都キャンパス内の元岡古墳群G群六号墳で発見されたもので、古墳群の出土品とあわせての指定となりました。銘文に見られる「庚寅」は西暦五七〇年をさし、大刀の製作年と考えられています。わが国で暦が使われていたことが考古学的にわかる最古の例として、とても重要な発見と言えるでしょう。

平成二十八（二〇一六）年刊行の『資料編 考古1』では、巻頭にカラー写真を掲載し、第IV部主要遺跡解説の「元岡古墳群G群」で、大刀のX線写真や古墳の実測図とともに詳しく紹介しています。

● 近世

近世部会では『資料編 近世4』の刊行に向けて、資料調査を進めています。

『資料編 近世4』は村と浦、つまり農村や漁業・廻船業を生業とする浦に関する資料を掲載する予定です。元禄国絵図と一緒に作成された「郷村帳」によると、福岡藩の村数は七八九カ村にのぼります。現在の福岡市域に限っても二〇〇カ村近くになります。

しかし、村や浦の資料は武士や町人の資料と比べて、その所在が分かっているものが圧倒的に少ないのが現状です。つまり、福岡市域の村や浦の様子を描き出すための材料が圧倒的に足りない状況です。

皆さんの家のどこかに、筆で文字が書かれた紙などがひっそりと眠っていませんか？ そんなときには福岡市史編さん室へ是非一報ください。

● 古代

十一世紀、大宰府の役人として都から筑前国にやって来た人物に、藤原高遠がいます。歌の名手だった彼は住吉神社（現博多区）を訪れ、「すみよしと、思ふにはあらで、ちはやぶる、神の心を、まつるなりけり」（こが住みよいと思うわけではなく、神様の心をお祀りするのです）と詠んでいます（『大式高遠集』一八三番）。赴任の際に早くも仕事への不安を漏らしていた高遠は（同一七八番）、案の定、筑後の国司ともめて職務停止になりました。彼にとって、九州暮らしは楽しいものではなかったかもしれませんね。今では福岡は住みやすいまちランキングの常連、人気の転勤先だと聞いたら、驚くのではないのでしょうか。こうした史料に寄り道をしながら、編集作業が続けています。

● 近現代

大正期は水道敷設など市政の重要施策をめぐって、市長と市会（市議会）が対立し、また市会でも党派と地域対立がねじれて、市政に混乱をきたします。大正二（一九一三）年の市会議員改選によって、市会では反市長派が多数を占め、前年に決定された水道工事の方式について変更を提案します。すでに国の認可と補助を受けている市長はこれを拒否します。そこで市会は水道工事の差し止め決議をおこない、市政が停滞してしまいます。大正三年に福岡財界の安川敬一郎らが調停に入りますが、難航して市長は辞任します。

『資料編 近現代3』では、まさにその当時の安川敬一郎の書簡を収録し、緊迫する福岡政治情勢を明らかにする予定です。

● 中世

現在編集作業中の『資料編 中世3』には、禪宗に関する資料も多数収録される予定です。中世におこった禪宗は中国との関係が深く、多くの修行僧が中国に渡りました。そのような修行僧の拠点となったのが博多であり、中国から帰国した栄西や円爾によって聖福寺や承天寺など多くの寺院が建立されました。

このような寺院は対外交易の拠点としての性格を有しており、禅僧には外交官としての役割も期待されていました。仏教関係の資料にも宗教的な内容だけではなく、国際交流の様子が色濃く反映され、当時の博多の様子を今に伝えています。

● 民俗

『民俗編3』のため継続している新聞記事検索、戦後に入りました。戦後は全国で電力不足に陥り、福岡は特に九州地方の渇水も相まって、厳しい電力制限を余儀なくされます。夜間電灯を使えるのはわずかな時間で、それも電圧が低く薄暗いため、「ローソク送電」と呼ばれました。情勢不安による治安の悪化に加え、夜は暗闇とあって強盗などが横行し、物騒な事件記事が連日並んでいます。

そうしたなか、どんたくや山笠が再開され、昭和二十三（一九五八）年には国体の開催地となり、福岡は徐々に活気を取り戻していきます。悲惨な事件や思いがけない苦境にぞくぞくと見舞われるものの、日夜奔走して復興を目指す人々の姿からは、今日学ぶべき点も多いと感じさせられます。

新修 福岡市史 ナナメ読み

その5

特別編 福岡城 ―築城から現代まで―

絶対的に正しいホンモノの福岡城の姿とは？

今回の
ナナメ読みは



A4 判 上製本 340頁
オールカラー
頒価 2,500 円 (税込)

福岡市早良区出身の歌手・小柳ルミ子さんの一九七一年のデビュー曲「わたしの城下町」は一六〇万枚もの売上げを記録したそうです。「わたしの」とあるので、小柳さんの故郷の福岡の曲と思いがちですが、実際は歌詞の中に具体的な地名は出てきません。聴く人それぞれが自分にとっての城下町を思い描けるような歌詞になっていたのです。

同じタイトルで、二〇〇三年に連載を開始し、二〇〇七年に書籍として刊行されたのが木下直之さんの『わたしの城下町』（筑摩書房）です。こちらは全国の城郭が明治以降にどのような歴史をたどり、人々が城に何を託してきたのかという部分にスポットを当てたもので、従来あまり注目されてこなかったお城の見方を世に示しました。

これ以降、全国の博物館でも、江戸時代以前の城郭だけでなく、近代以降の使われ方も紹介する展覧会が企画され、多様な城郭像が提示されるようになってきました。無意識にイメージされていたそれぞれのお城や城下町を意識的に捉えて相対化していこうとするのが、近年の潮流と言えるのかも知れません。さて、ひるがえって福岡城です。皆さんは

福岡城にどのようなイメージをお持ちですか？ 試しにインターネットで「福岡城」で画像検索をすると、重要文化財の多門櫓、復元された下ノ橋御門といった建物が出るほか、桜をライトアップする様子やアート系のイベントの写真が出てきます。また、福岡城をセントラルパークを構成する一つのゾーンとして整備していこうという市の方針を示したイラストも見られます。さまざまな催事をおこなう市民の憩いの場として位置づけられている様子が窺えます。

これが昭和に遡ると、古代の外交施設・鴻臚館の発見（一九八七年）、平和台球場をフランチャイズとした西鉄ライオンズの日本シリーズ三連覇（一九五六〜五八年）、平和台競技場をメイン会場とした国民体育大会（一九四八年）など、熱狂の舞台となっていたことが見えてきます。

また、戦前の福岡を知る方にとっては福岡城Ⅱ歩兵第二十四連隊というイメージを持たれる方もおられるかもしれません。城内には明治初めこそ県庁が置かれていましたが、一八八六年以降は連隊本部が置かれ、終戦まで一般人の立ち入りが制限されました。

では、お城が本来の使われ方をしていたはずの江戸時代はどうでしょうか？ 城内には藩主の御殿や重臣の屋敷が置かれ、政治や儀礼の空間となっていました。こちらも長い江戸時代を通じて見ると、さまざまな変遷がありました。重臣もその時々の盛衰により屋敷替えが頻繁におこなわれ、藩主が政務をおこなう場所も本丸から三の丸へと移り、また、代替わりに合わせて大改修をおこなうこともたびたび見られ、常に変化し続けていました。

そのような福岡城の多様な姿を一冊に凝縮したのが『特別編 福岡城』です。築城から現代までの福岡城の歴史が豊富な写真や図版とともに通観できる内容となっています。

今後、福岡城は「国史跡福岡城跡整備基本計画」（二〇一四年策定）のもと、さまざまな整備がおこなわれていきます。「わたしの城下町」同様に、「わたしの福岡城」もそのイメージは多様です。幸い本書には、先人が福岡城をどのように考え、接してきたのが余すことなく収録されています。城郭の歴史や史跡を活用したまちづくりに関心のある方ぜひ手にとっていただきたい一冊です。

電話申込み・店頭販売

福岡市博物館 ミュージアムショップ（福岡市早良区百道浜 3-1-1）
☎ 092-823-2800

店頭販売

政府刊行物 福岡市役所内サービスステーション
（福岡市中央区天神 1-8-1 福岡市役所 地下1階） ☎ 092-722-4861

ジュンク堂 福岡店（福岡市中央区大名 1-15-1 天神西通りスクエア 1～3階） ☎ 092-738-3322

丸善 博多店（福岡市博多区博多駅中央街 1-1 JR 博多シティ 8F） ☎ 092-413-5401

お問い合わせ先

福岡市博物館 市史編さん室（福岡市早良区百道浜 3-1-1）
☎ 092-845-5245



タイムマシンで となりの駅へ

—— 近過去への旅 ——

第5回

記憶の地図

文＝有馬 学（福岡市史編集委員会委員長／福岡市博物館総館長）

絵＝新田 岳（cubicface）

text_Manabu ARIMA, illustration_Takeshi NITTA

コロナ禍の緊急事態で強いられたい在宅生活も、悪いことばかりではない。ありふれた行為ではあるが、気にかかりながら机の上に積んだままの本に手を伸ばしてみる。我が収穫は佐多稲子『私の東京地図』だ。著者の代表作として声価の定まったものであるが、ここでは近代文学史上の評価とは別のことを書いておきたい。

著者はこの連作小説で、上野の大衆的な料亭の女中奉公に始まる自身の生活史を、転々と借家生活が続けた住まいと仕事先の町の描写を通して描いている。著者の細部に分け入るような筆遣いによって、職場の人々や家主の家族、隣近所の人々の立ち居振る舞い、日常の会話の片々などが私たちの眼前に立ち上がる。

もちろんその背後には、育った家庭の零落、不幸な結婚と破綻、非合法の左翼運動と検挙・転向などがあり、敗戦後にそれらを回想する著者の姿がある。それによって私たちは、人がある時代を生きるということが、その人が暮らした町の風景、駅や日々通った道、坂の上り下り、角々の店の姿などと切り離しては考えられないことに思い至るのである。

そしてこの本の眼目は、それを環境だの時代背景だのという見せ方ではなく、「地図」として語り切った点にある。私が手にした講談社文芸文庫版の川本三郎による解説は、東京はいつも「普請中」という、これ以上にな的確な表現で始めている（森鷗外の言葉だそうだ）。大きな普請で激しい変化を繰り返す東京では、変化のたびに古い風景が消える。

「普請中」ということなら、我が福岡も人後に落ちない。そして「普請中」とは、これから本番を迎えようとする「天神ビッグバン」のような大規模な都市開発に限らない。ひっそりと記憶から消えていく風景が、誰かの生きた証として大切だったとしても、それは「普請」の大小とは関係ないのだ。

そんな「普請中」の町の姿は、記憶している誰かが書き残さないで後世に伝わらない。常に「普請中」の都市で、記憶の地図は改訂を重ねないとあつという間に穴だらけになるのだ。だから、あまり数は多くないが、先人によって書かれた記憶の地図を、折にふれて確かめておくのも市史編さん事業の務めだろう。

西日本新聞の編集局長、出版部長をつとめた鬼頭鎮雄は、1923（大正12）年に関東大震災の東京を焼け出されて福岡に移住し、西日本新聞社の前身の福岡日日新聞社に入る。鬼頭の回想『博多大正ろまん』（西日本新聞社、1981年）は、根っからの福岡育ちでないだけに、そこに住んだ者ならではの記憶に外からの眼が加わって、大正末期の福岡・博多の貴重な地図となっている。

西も東もわからない福岡の町で、紹介状を持ってはじめて訪れた福岡日日新聞社は、須崎土手町五番地、当時としては目立つ木造洋館で、瀟洒な姿を那珂川の清流に映していたとある。その頃の博多湾の水は「澄んで美しかった」とも書かれているから、「那珂川の清流」は決して誇張ではないだろう。

当時の福岡市は狭かった。市域は、西は樋井川の今川橋、東は石堂川を境とし、「海岸線にへばり付いたような狭い地域だけ」である。住吉神社のすぐ裏を旧国鉄（鹿児島本線）が走っていて、「竹下までは田んぼ続きで、さえずる何物も」なかったという。

入社時23歳ですでに結婚していた鬼頭は、借家を探して福岡城堀端から海岸にかけての町筋を巡った。上ノ橋電停（現 平和台交差点付近）を北へ進むと魚町、そこから旧本通り（現 昭和通り）を西に行くくと大工町、簗子町、湊町と続く。大工町には人力車を作る店や日本刀の研師の店があり、お寺の多い町筋だったという。旧本通りから北に下る道は、どれも海岸まで抜けていて、干潮時には「白砂を踏んで次の筋まで歩き、コの字型にすべての町筋を歩いて」貸家札を探した。借りた家は「旧本通りに面した町家風の家の土間を通った奥にある二階建ての独立した離れ家」である。土間があって炊事場もあり、周囲は静かだったという。

鬼頭は、福岡日日新聞の主筆であった菊竹六鼓の警咳に接したことが、記者としての生涯を決めたと言っている。新聞記者が「社会の木鐸」を自認していた時代に、最も木鐸らしい記者であった六鼓を師と仰いだ。そう書くことで、鬼頭は記者としての生き方や価値観を表明している。鬼頭の描く福岡・博多の風景は、そのような生き方のバックグラウンドである。それを「地図」と呼んでみることで、歴史の場を再構成する新たな視点が生まれそうな気がする。

（なお須崎土手町時代の福岡日日新聞社の姿は、『新修 福岡市史 特別編 活字メディアの時代—近代福岡の印刷と出版—』の52～53頁に見ることができる。ぜひ確かめてほしい。）



今回は、昭和34(1959)年から始められた「福岡市史」が終刊し、現行の『新修 福岡市史』編さん事業が開始される経緯についてお話しします。

市役所内部では今後の「福岡市史」をどうするのか、試行錯誤が続けられていました。そのことは外部から市史重視の声が継続して寄せられていたことと無縁ではなかったのです。

平成10(1998)年12月に選出された新市長へ、さまざまな形で市史編さんへの要望が出されました。A先生は、福岡市の歴史についてのご進講をされましたし、B先生は、中国の上海空港で偶然に出会った市長に、日本史のなかの福岡の重要性について延々と話されたそうです。そのような外部からの応援の声はまことに嬉しいものですが、山崎広太郎市長(当時)から、市史編さんについて具体的な話を聞こうと電話があるまで1年半が経過していました。

こうして総務企画局の幹部と協議が始まりましたが、会議中にG7サミットの蔵相会合を福岡市博物館で開催するというホットなニュースがテレビから流れてきました。何か吉兆的なものを感じた瞬間でした。さらに朗報は続きました。平成12年度予算に市史編さん事業費が新規に518万3000円計上されたのです。総務企画局への予算でしたが、足がかりができた事が本当に嬉しく先生方に連絡しなくなった事を思い出します。

サミット蔵相会合の前には内外の要人が多数視察に訪れました。会場案内はそこそこに本市の歴史解説を熱を込めておこなったことも思い出されます。サミット後には総務企画局や教育委員会総務部との具体的協議がおこなわれ、いよいよ期待感が膨らんでいくのを感じていました。さらに不思議なことには、いくどとなく市長と直接面談する機会に恵まれ、市長の観光・文化面に対する熱意を感じさせられたことでした。予算は少額ながら増額され、それで他都市の市史編さんの現況調査がおこなわれ、本市の現状が客観的に説明できるようになっていきました。

具体的な編さん事業ですが、かつてのように高名な大学教授に自治体史編さんを丸投げできる時代はもはや過去のものとなっていました。行政自体がどれだけ主体性を持ってこの事業に取り組むのかが問われる時代となっていたのです。先回述べたように、九州大学の川添昭二先生にご教示いただきながら、当方の足場を構築する準備を心掛けていました。予算が付けば早

速にも動きを見せねばなりません。そこで将来の編さん執筆陣を極秘裏に想定し、参加を約していただく必要がありました。いつ何時事業予算が付くかわからない段階で、予算獲得の暁には、早速福岡市史編さんへ参画をしてもらうという虫の良い話に乗っていただく必要があったのです。

平成16年度予算の審議が始まりました。博物館からは、平成2年の開館時から10年余を経て古びた常設展示のリニューアルと市史編さんとを重要事項として提出していました。しかし財政局長への復活折衝では、リニューアルは不可、市史は「三役経営会議」へ復活要求せよというものでした。財政局長段階で、現予算の900万円余を少し超える予算を付けられると、さらに上位の段階に復活要求をする事は実質上不可能です。市長・助役ら三役の判断を仰げる「経営会議」は福岡市における最終意思決定の場であるのです。財政局長に感謝したい気持ちでした。

平成16年1月20日、筆者のプレゼンテーションの番です。サミット等において誇りを持って披露できる印刷物という話はなかなか通用しそうにありません。思わず起立して「私はこの3月で定年です。市史編さんを目指し、研究者諸先生方には多大の協力をいただいてきましたが、市史編さん予算が微増なら要らない。ゼロ回答をください。今なら、私の責任で、研究者諸兄にはお詫びを申し入れますから」と言い、着席しました。一瞬間があつて市長が「1億はダメだが、7000万円です」と発言され、皆が啞然としていましたし、筆者も驚きました。1月30日、7000万円が正式に言い渡されたのです。

4月1日、歴史ある「福岡市史編さん室」の看板が福岡市博物館の一室に掛けられました。編さん事業が本格的にスタートしたのです。まことに嬉しい退職記念となりました。

24回にわたって「福岡市史」の道のりを振り返ってみました。独りよがりな点多々あったかと思いますが、よろしくご海容ください。 [終]

※ 市史編さん予算に関する数字は各年度ごとに福岡市が発行する「一般会計及び特別会計予算案説明書」に拠った。

※ なお、本稿は『市史研究 ふくおか』第10号所載の田鍋隆男「『新修 福岡市史』が刊行されるまで」とあわせてご覧いただければ幸いです。

お詫び

「市史だより Fukuoka22」に掲載の「シーサイドももち建物図鑑」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

P6【誤】出島寛 → 【正】出江寛 / 【誤】シーサイドももちヴェルデコート → 【正】シーサイドももちヴェルデコート(世界の建築家通り: 水谷頼介)

表紙の写真

かつての姿を感じる「南区若久3丁目」

写真の左側の低い敷地に建っているのが東若久小学校、急な坂道1本を挟んで、写真ではわずかにしか写っていませんが、右側には八良ヶ浦池の窪地が続いています。まるで坂道が橋のようです。それもそのはず、かつては小学校の敷地も池でした(そのエピソードは5ページをご覧ください)。坂道は、この高まりが2つの池を横切って、両側の丘陵を繋いでいたなごりです。

今回の特集の地域、南区野間・若久に注目したのは、『西日本文化』492号(西日本文化協会、2019年)の福岡市南区特集に、市史編さん室が企画から参加したことがきっかけでした。『西日本文化』492号には、この地域の旧道や、ここでは触れられなかった歴史もたくさん載っています。ぜひあわせてご覧ください。



▲東若久小学校の隣にある八良ヶ浦池

福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だより Fukuoka」のバックナンバーも見られます!

福岡市史ホームページ ▶ <https://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。

福岡市博物館ホームページ ▶ <http://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断模写・転載を禁じます。